ART
SUPPORT
TOHOKU-
TOKYO

東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業［宮城］

# MIYAGI REPORT 2011-2012

## 10のプロジェクトとシンポジウム

アートが被災地にできること。
被災地がアートと出会うこと。

こどもと復興商店街ワークショップ

アーティスト・ラン!! イボイシステーション!!

雄勝法印神楽　舞の再生計画

カラダでぶつかり、汗を流す。集え、21人の浜っ子たち

アート・インクルージョンクリスマスプロジェクト2011

女川コミュニティカフェプロジェクト

震災ケア・アートサロン

山元町伝統工芸職人支援事業

藤浩志とカンがえるワークショップ

マイタウンマーケットキャラバン

えずこホール
仙南芸術文化センター

## ■ MIYAGI・10 のプロジェクトとシンポジウム

東日本大震災の地震と津波により、東北の沿岸部はその地形を大きく変えた。人々の日々の営みや、拠って立つ場所や、心の風景も、それぞれ大きく形を変えあるいは失われた。復旧から復興へ向けて、戸惑いと紆余曲折の中、さまざまな試行錯誤と葛藤が続いている。本事業は、東京都によるアートを活用した被災地支援事業として被災三県で展開し、宮城県ではえずこ芸術のまち創造実行委員会が事務局となり、沿岸部を中心に、アイデンティティの再生とコミュニティの再構築へ向けた 10 のプロジェクトを支援。3 月にそのまとめとしてシンポジウムを開催した。アートは被災地で何ができるのか。被災地はどのようにアートと出会うのか。本レポートはこれから長く続く復興の道程の途中経過の記録である。

# ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

## ■ 東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業

本事業は、「東京緊急対策 2011」の一環として、東京都が、公益財団法人東京都歴史文化財団と共催し、被災地に対して、芸術文化活動の提供やアーティストの派遣等を行う事業です。

地域の多様な文化環境の復興を目指して、本事業は、東京都文化発信プロジェクトの一環である「東京アートポイント計画」の手法を用いて実施されます。事業の実施にあたっては、被災地の生活圏において、多様な分野や人々との交流のプロセスを重視したプログラムづくりを行います。事業の立案や実施は、現地のアート NPO 等の団体やコーディネーターと連携して行います。震災以降にさまざまな場面で分断が余儀なくされる地域コミュニティへ、アートプログラムの実施を通して新たな交流の回路を拓き、地域の多様な文化環境の復興を支える仕組みづくりを支援します。

①気仙沼にリアス・アーク美術館主任学芸員・山内宏康さんを訪ねる
②津波被災地のフィールドワーク（名取市閖上地区）
③「編集ワークショップ」で案を発表する参加者

3.11 から時間が経つにつれ、季節の変化とともに少しずつ移り変わる被災地へ出かけ、瓦礫の山がどのような街並みだったのか、あの日を境に人々の居住まいがどのように形を変えたのかに思いを馳せるヒアリングワークショップを開催。まちとひとを活き活きと繋ぐ美術家・藤浩志とともに、9 月には気仙沼、名取、七ヶ浜、塩釜の沿岸部を訪問リサーチ、被災地の最前線にある文化施設関係者 3 名の話を聞き、11 月は内陸部で二次避難所を切り盛りした旅館の女将、子どものケアにかかわる支援活動を行う劇作家、被災地での健康管理に奔走する健康運動指導士に話を聞いた。さらに 1 月には、編集者・影山裕樹を招き、ワークショップを通して考えたことを「伝える」方法を模索する「編集ワークショップ」を開催した。

期間：平成 23 年 9 月 ー 平成 24 年 1 月
場所：宮城県内各所
主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会、えずこホール（仙南芸術文化センター）、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

# 藤浩志とカンがえるワークショップ

◎影山 裕樹
（編集者・ライター）

雑誌『STUDIOVOICE』、出版社フィルムアート社を経てフリーに。アート／カルチャー系書籍の企画・編集、および各種媒体で執筆活動などを行う。情報を塊にし、議論の種を世の中に植え付ける方法としての編集業を生業としている。

◎藤　浩志
（美術家）

大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し、全国各地のアートプロジェクトの現場で「対話と地域実験」を重ねる。都市計画事務所勤務を経て 1992 年藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かした活動の連鎖を促すシステム型の美術表現を行っている。

## ●えずこホール

住民参加型文化創造施設を運営コンセプトに、音楽、演劇、ダンスほかさまざまな参加体験型の事業を各種展開している。現代アートの分野においても様々なアーティストのワークショップを開催しており、藤浩志とカンがえるワークショップは、東日本大震災の現場に足を運び、人の話を聴き、次の一歩を考えるワークショップとして 3 回にわたり展開した。
http://www.ezuko.com/index.html

①「れきみん秋祭り 2011（仙台市・榴ヶ岡公園）」にて、再建した舞台を使って演舞を披露
②雄勝小学校での「神楽の舞ワークショップ」
③雄勝地区大浜葉山神社にて、神楽舞台の仮組と引き渡し

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた石巻市雄勝地区は、東北を代表する舞台芸術である「お神楽」を接点に紡がれた特別なコミュニティーを形成していたが、15の浜の神社がそれぞれに所有していた神楽舞台のほとんどが津波によって流出してしまった。現在、町の人々が各地に分散しての居住を強いられる中、法印神楽の上演はコミュニティ再建の心の拠り所となるものである。雄勝法印神楽再生実行委員会では、神楽が成立するために必要な仮設の野外舞台を再建し、捧納月である10月、復活を象徴する演舞を仙台で上演した。また、運搬のできる仮設の野外舞台によって、2012年以降、浜を巡っての公演が再開可能となる舞台環境を整えた。同時にソフト面の支援として、雄勝の小中学生が神楽の舞を体験し、発表までを行なうワークショップを雄勝法印神楽保存会とともに開催した。

期間：平成23年9月－10月
場所：石巻市旧雄勝町、仙台市・榴岡公園
主催：雄勝法印神楽再生実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
監修：千葉雄一（民俗芸能研究者）
設計施工：片山鶴衛（東建設株式会社代表取締役社長）＋仙台高専建築デザイン学科坂口研究室

# 雄勝法印神楽　舞の再生計画

## ●雄勝法印神楽再生実行委員会

国の重要無形文化財「雄勝法印神楽」の再生のために、震災前から継続して雄勝法印神楽に関わってきた八巻寿文、坂口大洋が中心となり、地元の保存会と連携し実行委員会が結成された。仮設神楽舞台の設計や制作、公演などの支援活動には、工務店、文化施設、学生など様々な有志が参加し、神楽の再生に関わっている。

◎八巻 寿文
（せんだい演劇工 10-BOX 二代目工房長）

高校卒業後フランスへ留学。帰国後は舞台照明の仕事をしながら、画家として活動。エルパーク仙台、仙台市青年文化センター勤務を経て、2002年よりせんだい演劇工房10-BOX勤務。2005年より現職。

◎坂口 大洋
（仙台高等専門学校建築デザイン学科准教授）

東北大学助教を経て2011年4月より現職。専門は文化施設計画・設計・運営及び地域計画。現在は公共ホールを中心とした震災被害の調査及び復旧支援に奔走。参画プロジェクト：東北大学川内萩ホール、せんだい演劇工房10-BOXなど。

①「人が集まる場づくり」について住民と対話するワークショップ
②コミュニティカフェの壁を塗るワークショップ
③和紙を使った灯りを作るワークショップ

三陸リアス式海岸の最南端にある宮城県牡鹿郡女川町は、東日本大震災の津波で市街地のほとんどが壊滅。避難所から仮設住宅に人々の住まいは変わったが、平地の少ない地勢上、元のコミュニティが分断され、町の存亡の危機と常に背中合わせの状態が続いている。それでも、女川の人々は港町特有の明るく開放的な気質で笑顔を絶やさない。
対話工房はそんな女川の人々とともに、女川町立病院敷地内コミュニティカフェを人が集まる賑やかな場にするための支援を行っている。地元協議会と建築家、アーティストの三者間で設計から運営までを計画。さらに「つくる・きく・はなす」をテーマにしたアートワークショップを通して住民が製作に参加できる仕組みを作り、地元住民と支援者とが顔の見える関係で対話を重ねる場をコーディネートしている。

期間：平成23年11月ー平成24年2月
場所：コミュニティスペースおちゃっこ倶楽部（女川町立病院前仮設）
話者：小山田徹、ティトゥス・スプリー、海子揮一　特別講師：太宰聖一
主催：対話工房、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
後援：女川町復興連絡協議会
協力：震災リゲイン、ドイツ大使館

# 女川コミュニティカフェプロジェクト

◎小山田　徹
（美術家・京都市立芸術大学准教授）

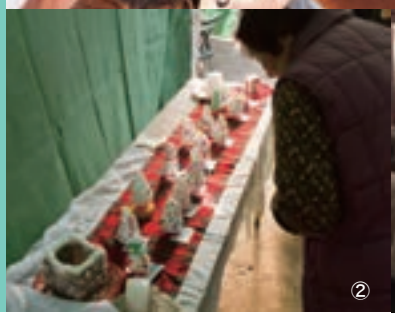
84年よりパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で主に企画構成、舞台美術を担当。1990年から、さまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加するなど、さまざまな友人たちと造形施工集団を作り共有空間の開発を行っている。

◎海子 揮一
（建築家）

世界の民俗建築を巡る大陸横断の放浪を経て、建築設計の実務に携わる。主に住宅・店舗のデザインを手がける傍ら、「アート屋台プロジェクト」、「対話工房」（右記参照）を立ち上げ、人と土地の新しい関わりの場を作り続けている。

## ●対話工房

「日常を失ってしまった人々に表現と対話の場を共に作り出す」ことを目標に建築家・アーティスト・メディアクリエーターそして地元のメンバーで結成。「被災者と支援者」という抽象的な関係を作らず、顔と顔、手と手がつながる個人的な関係の連鎖反応を深めるように考えて活動している。
http://taiwakobo.jimdo.com/



①あすと長町仮設住宅で、巨大パンケーキ作り
②事前ワークショップで住民が製作したキャンドルを展示
④アートの有識者を集めたカフェ・トーク

「アート・インクルージョン」は年齢、性別、国籍、障害のあるなし、アートの基礎知識やスキルなど関係なく誰もが自由に参加できるバリアフリーのアートプロジェクトである。様々なメディアを融合させ地域に根ざし継続していくことを目指し、2010年より街なかでのアートプロジェクトとして開始した。実行委員会は東日本大震災を受け、2011年12月にあすと長町仮設住宅（仙台市）の広場でクリスマスをテーマとしたアート・インクルージョンによるイベントを開催し、2回の事前ワークショップで住民が製作した作品の展示やアートワークショップを実施、仮設住宅の交流促進に取り組んだ。また、前日には復興に向けアートの現場で活躍する有識者が集う「アート・インクルージョン カフェトーク」も開催し、各々の取り組みを共有するとともに、アートで何かできるのかを参加者を交えて討議した。

期間：平成23年12月16日（金）－17日（土）
場所：あすと長町仮設住宅　ほか
主催：アート・インクルージョン実行委員会、
　　えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、
　　東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
協力：仙南芸術文化センターえずこホール、一般社団法人 MMIX Lab
助成：ARTS NPO AID、
　　東日本大震災復興支援財団「子どもサポート基金」

# アート・インクルージョンクリスマスプロジェクト2011

## ● アート・インクルージョン実行委員会

仙台市太白区の商店街をはじめ、アートＮＰＯ、福祉ＮＰＯおよびその他の賛同者が協働で組織。音楽と美術（アート）を通して障がい者の社会的自立を支援し、人にやさしい街づくりを行うことを目指している。長町駅付近を中心に多彩なアートプロジェクトを展開中。　http://art-in.org/

◎村上 タカシ
（MMIX Lab 代表、宮城教育大学准教授）
1986年より美術家として東京で活動を開始し、国内外の展覧会やアートプロジェクトに多数参加。2003年より仙台で学校やまちを使ったアートプロジェクトを展開。最近は芸術普及や文化・教育政策をテーマに文化施設等でレクチャーやワークショップ、アクションなども行う。

◎白木 福次郎
（特定非営利活動法人「ほっぷの森」理事長）
知的障がいのある人にスポーツを通して社会的自立を支援するスペシャルオリンピックス日本・宮城の設立に関わったのをきっかけに、2007年より障害のある人の一般就労（就職）支援に携わる。2008年特定非営利活動法人立ち上げ。2010年よりアート・インクルージョン実行委員会に参加。

①集会所上棟式での餅まき
②子どもたちとかまどを作るワークショップ
③小学校での再会に笑顔がこぼれる
④集会所の壁を作るワークショップ

水生資源に恵まれた沢と三陸漁場に面した港を有する牡鹿半島桃浦地区は、東日本大震災の大津波で壊滅的な被害を受けた。石巻湾を見下ろすように建つ荻浜小学校にも海水が押し寄せ、校舎はかろうじて難を逃れたものの、家を失った人々が次々に転出、もともと21人だった全校生徒は転出により9人になってしまった。
震災前、抜群の自然環境に恵まれた荻浜小学校の子どもたちは、学年を超えた児童間の結びつきや互助関係が強く、年齢を超えた人間関係の形成に非常に恵まれていたが、現在、離散した人々が集落に戻る目途は立たず、桃浦地区の子どもたちはかけがえのない学びの場を奪われつつある。
荻浜小学校の子どもたちと桃浦地区を支援するため、ガレキ撤去や集会所建設にも汗を流す「ユイノハマプロジェクト」は、桃浦地区に「浜っ子の場」をつくるワークショップをこどもたちと一緒に継続的に行っている。

期間：平成23年12月ー平成24年3月
場所：荻浜小学校および周辺地区
アーティスト：岩間賢
主催：結浜プロジェクト実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

# 「カラダでぶつかり、汗を流す。集え、21人の浜っ子たち」

◎岩間　賢
（美術家・東京芸術大学非常勤講師）
日本の土壁技法や中央アジアの日干し煉瓦を用いた持続可能な構造物を協働制作プロジェクトで多数創造。美術教育やワークショップを行うほか、国際交流プロジェクトや展覧会などの企画運営にも関わる。

◎大島 公司
（狩猟家・クリエイティブディレクター）
広告代理店でのプランナーを経て、フリーランスに。狩猟等をつうじて「食べる」・「働く」といった日常茶飯の行為をあらためて見つめ直す試みを行っている。

## ●ユイノハマプロジェクト

美術家・岩間賢を発起人として、「未来をつくっていく子どもたちのために」という想いに共感した狩猟家、建築家、デザイナーなどの仲間が集まり2011年4月に設立した団体。「ともに過ごし、汗を流し、同じ釜の飯を食うこと」を基本に、震災直後から桃浦地区に継続的に通い、浜っ子のこれからをお手伝いしている。
http://yuinohama-p.com/index.html

①住民のみなさんと仮設住宅のテーマソング作り
②仮設住宅集会所でラジオ番組を生放送
③完成したテーマソングを練習する住民のみなさん

避難所生活から仮設住宅へ環境が変わった後も、被災地での生活環境は日々変化している。制限ある日常生活へのマンネリ化や居住環境のストレスを緩和するため、そして入居者同士の関係性や交流の場を創るため、このプロジェクトでは津波被害を受けた塩竈市の仮設住宅・伊保石地区を拠点に、アートワークショップや音楽を通じたコミュニティー支援を行った。
震災から約1年となる2012年1月～2月、集会所で「1日限定ラジオ局」を開設して仮設住宅内に「自分達のラジオ番組」を放送したり、みんなで詩を書いたテーマソングを作る作曲ワークショップを実施。アーティストと仮設住宅住民で協力し合って震災復興を願う思いを形にし、心の復興を共有した。

期間：平成24年1月－2月
場所：伊保石仮設住宅、海岸通仮設店舗敷地内
アーティスト：中島佑太、首藤健太郎、處 美野、滝沢達史
主催：ビルド・フルーガス、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
協力：3がつ11にちをわすれないためにセンター、えぜるプロジェクト、高橋正典（バリトン歌手）、飛びだすビルド!

# アーティスト・ラン!!イボイシステーション!!

## ● 飛びだすビルド！

2007年からスタートしたビルド・フルーガスの出張ワークショップで、高田彩を中心に、宮城県内の若手アーティストで組織。震災後、伊保石地区仮設住宅の支援に参加している。普段は学校や児童館を中心に活動し、創造的に発想することや挑戦することを「楽しい」と感じられる若者の育成と、発想豊かなアーティストとの交流を通して創造力を刺激し合い柔軟性を養う情操教育を目的としている。
http://www.birdoflugas.com/workshop/

◎高田　彩
（ビルド・フルーガス代表）
カナダ留学後、2006年オープンしたビルドスペース（塩釜市）を拠点に、北米アートの紹介やアーティストネットワーキングを行う一方、アートと地域の距離を縮める出張ワークショップやイベントを開催。アートの価値や存在意義を高める取り組みを実践している。

◎首藤 健太郎
（音楽家）
東京藝術大学大学院音楽研究科作曲専攻修士1年生、S-MAPS（洗足学園プレップミュージックスクール）講師。作編曲・ピアノ演奏・指導・企画・コラボレーション等、ひとつのことにとらわれずに幅広く活動する音楽家を目指している。

◎中島 佑太
（アーティスト）
小学生から続けてきた野球の経験をもとに、集団スポーツの中にあるコミュニケーションを手がかりにして、他者との協働によるアートプロジェクトに取り組んでいる。前橋市在住。

①がんご屋応急仮設住宅での「出張カフェ」
②「マイタウンマーケット」の醍醐味を伝える発表会
③小川公園応急仮設住宅で開催された「マイタウンマーケット」の様子

小川公園応急仮設住宅（福島県新地町）でこれまで３回実施してきた「マイタウンマーケット」。仮設住宅の集会所につどう子どもと大人が協力しあいながら、カフェ、スーパー、温泉、美術館、コンサートホール、町役場、ブティックなど、町を模した店舗を計画して一日のイベントとして開き、にぎわいと交流をつくりあげてきた。このマイタウンマーケットの仕組みを他の仮設住宅にも伝えていこうという試みが「マイタウンマーケットキャラバン」で、これまでマイタウンマーケットを実施してきた小川公園応急仮設住宅の有志のメンバーが、近隣にあるがんご屋応急仮設住宅の集会所で出張カフェとゴザ編み・カゴ編みコーナー、さらにマイタウンマーケットの醍醐味を伝える発表会を実施した。さらに、がんご屋仮設住宅でも今後マイタウンマーケットを開催できるよう、定期的に訪問して対話を重ねながら、マイタウンマーケットの仕組みを自分たち自身の手で伝えている。

期間：平成24年1月ー３月
場所：福島県新地町の仮設住宅
主催：マイタウンマーケット実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

# マイタウンマーケットキャラバン

◎北澤　潤
（アーティスト）
ある地域社会に寄り添うように現れるもうひとつのコミュニティを設計し、そのコミュニティがつくられ周辺の日常と係わる過程を自ら調査しつづける。社会に携わる大小さまざまな団体および個人との交渉を通して、地域に同居しながら、協働的かつ遊動性ある活動を実践している。

◎西川 昌徳
（自転車旅人）
大学卒業後、世界を旅することを決意。2007年、中国上海から海外自転車旅をスタート。2009年12月までの２年半でアジア８カ国を旅し、走行距離17000ｋｍにおよぶ。現在は日本各地で写真展、講演活動を行う。2012年春から「自転車世界一周」の旅を再開予定。

## ●マイタウンマーケット実行委員会

北澤潤の呼びかけにより、小川公園応急仮設住宅の住民、仮設住宅以外に居住している町民、地元の学生、さらに町外ボランティア等垣根のないメンバーによって結成された、マイタウンマーケットを実施・運営するための活動団体。定期的な話し合いや、子どもたちの発想から企画を考える「子ども会議」、マイタウンマーケット開催にむけた準備など、日々活動中。
http://mytownmarket.blogspot.com/

東日本大震災が子どもたちの心に与えた影響は甚大だが、子どもに関わる大人の中にも、被災の大小に関わらず、被災時の記憶、余震の恐怖、さらに放射能への不安が渦巻き、子どもに落ち着いて関われない状況が起き始めている。このプロジェクトは、子どもをケアするために、子どもに関わる大人の心の安定を取り戻すことを目的としている。
大人の被災のケアは語ることから始まると言われているが、ただのお茶飲み話では参加しにくかったり、話しにくいため、手を動かしものを作りながら震災体験・子育ての悩みを語り合うサロンを開催。作品が出来上がる喜びを感じながら、自分だけが悩みを抱えているのではないという安心感を得てもらうことを目指した。また、被災状況のひどい保育士や児童指導員らに絵本作家による読み聞かせパフォーマンスを含んだトークサロンを開催し、楽しい時間を持ちながら子どもたちとの接し方を学び、意欲を高めてもらう機会とした。

①お母さんたちとクリスマスオーナメントを作るワークショップ
②保育士さんたちと羊毛フェルトを使ったワークショップ
③絵本作家飯野和好によるトークサロン

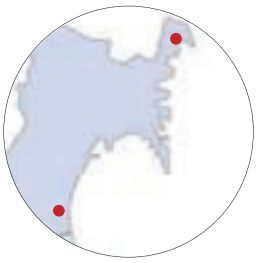
期間：平成23年12月ー平成24年3月
場所：仙台・子どもセンター ほか
主催：こどもとあゆむネットワーク、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

# 震災ケア・アートサロン

## ● こどもとあゆむネットワーク

2011年3月、横田重俊を中心に、仙台で子どもに関わる活動をしてきた人や周辺で支援してきた人が個人で集まって立ち上げた。「子どもたちに日常を取り戻す」ことを目標に活動し、これまでに約7万冊の絵本や児童書を被災地に届けた。ほかに、仮設住宅や仮設校舎・園舎で使用できる本棚を贈る「本棚プロジェクト」、絵本作家の描き下ろし原画を使用した手ぬぐいをチャリティー販売する「結（ゆい）手ぬぐいプロジェクト」などを展開している。
http://www.ayumunet.jp/

◎横田重俊
（こどもとあゆむネットワーク代表）
絵本と木のおもちゃ「横田や」（仙台市）店主。1978年の開店以来、良質なおもちゃと絵本の豊富な品ぞろえで地元住民に愛され続けている。震災後、「こどもとあゆむネットワーク」を立ち上げ、長年のネットワークを生かして子どもたちの支援を続けている。



①気仙沼でのアート復興会議
②学生による裂織でコースターを作るワークショップ（山元町）
③門脇篤によるプラダンワークショップ（山元町）
④開発好明による「仮想の街」を作るワークショップ（気仙沼）

ART ♡ POMP 計画は、震災後、アートによる支援を提供しようとする人と必要とする人をつなぐポンプの役割を果たそうと、一般社団法人 MMIX Lab が立ち上げたプロジェクトである。
気仙沼では、沿岸部の復興商店街（南町商店街）を舞台に、気仙沼出身・在住のアーティスト斉藤道有らとアートプロジェクトを展開。子ども集会所でワークショップを開催した。
山元町では、伝統工芸である裂織（さきおり）の継承を支援するため、東京芸術大学の学生を中心とした支援チームとともに現地公民館でのワークショップを開催した。
また、両日ともに、地元住民を交えての「アート復興会議」を開催、今現在どのような状況があるのか、アートを用いてどう支援することができるかなどを話し合った。

**アートポンプ計画 _ 気仙沼「こどもと復興商店街ワークショップ**

期間：平成 24 年 2 月 5 日（日）
場所：気仙沼復興商店街 cadocco（気仙沼市南町商店街内）

**アートポンプ計画 _ 山元町「山元町伝統工芸職人支援事業」**

期間：平成 24 年 2 月 11 日（土）
場所：山元町中央公民館

主催：一般社団法人 MMIX Lab、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
ディレクター：村上タカシ

# アートポンプ計画　ART♡POMP

◎門脇 篤
（アーティスト）
脱サラ後、「まちとアート」をテーマに活動。千葉県船橋市、宮城県東鳴子・古川・仙台、北海道岩見沢、横浜、東京足立区・歌舞伎町、滋賀県栗東、大阪・西成などで多数の街なかアートプロジェクトを手がけている。

◎開発 好明
（アーティスト）
発砲スチロール等を用いた作品やパフォーマンスで独特の世界を創造する美術家。 近年ではドイツと日本を中心に制作活動を行い、BankArt1929 のアーティストインスタジオ 2007「Explosion」では、「田中一」というテーマで蛍光灯とビデオを用いた作品を展開。

◎斉藤 道有
（アーティスト）
気仙沼市出身。実家は沿岸の商店街にある茶舗。仙台で就学・活動後、15 年ぶりに気仙沼に戻った直後に被災。甚大な被害を受け復興に重い課題を抱える故郷に留まり、支援者と地元のコーディネートやアートプロジェクトを手がけている。

## ●一般社団法人 MMIX Lab

非営利の芸術文化活動法人であり、国内外のアーティスト、クリエイター、芸術文化関係者やアート NPO をはじめ福祉やまちづくり NPO 等と連携し、様々なアートプロジェクトやワークショップを展開している。既成の芸術の枠組みにとらわれず、各種メディア（媒体）を融合させ、アートと地域文化を結び創造的芸術活動を行う。
http://mmix.org/index.html

東京都による芸術文化を活用した
被災地支援事業
Art Support Tohoku-Tokyo

ART
SUPPORT
TOHOKU-
TOKYO

## ◆ 芸術文化による支援をカンがえる シンポジウム

期間：平成24年3月24日［土］
場所：えずこホール（仙南芸術文化センター）
主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会、えずこホール（仙南芸術文化センター）、東京都、東京都文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

| スケジュール | 全体のプログラム |
|---|---|
| | Chapter1 【会場｜平土間ホール】 |
| 13:00-13:20 | 被災地支援、何はともあれやってみたこと …… 事業とプロジェクトの簡単な紹介 |
| （移動・休憩10分） | |
| | Chapter2 【会場｜ホール内各分科会会場】 |
| 13:30-14:45 | 分科会/10のプロジェクトと4つの方向性 ＊プログラムの詳細は右欄をご覧ください。 |
| （休憩15分） | |
| | Chapter3 【会場｜平土間ホール】 |
| 15:00-17:00 | パネルディスカッション「被災地でアートは何の役に立つのか」 |
| | Chapter4 【会場｜バーカウンター前】 |
| 17:20−19:20 | 懇親会/交流フリートーク 言いたいのに言えなかったこと、パネリストにもっと聞きたいことなどなど、軽食を片手に語り合いましょう! |

●コーディネーター／
藤浩志（美術家）
●パネラー／
小山田徹（美術家・京都市立芸術大学准教授）
岩間賢（美術家・東京芸術大学非常勤講師）
村上タカシ（MMIXLab代表、宮城教育大学准教授）
坂口大洋（仙台高等専門学校建築デザイン学科准教授）
横田重俊（こどもとあゆむネットワーク代表）
高田彩（ピルドフルーガス代表）
北澤潤（アーティスト）

### Chapter2 分科会／10のプロジェクトと4つの方向性

＊Chapter2の詳細プログラム

**GruopⅠ 「仮の暮らしを生きること」をカンがえる**

住み慣れた家を奪われ、入居した仮設住宅。いずれは出ていくことになる仮住まいの地で、共に暮らす人々とどのように過ごし、次の一歩へ向けて何を紡ぐのか。外からの支援者はその時間をどのように共有できるのか。3つのアプローチから考えます。

<参加プロジェクト>
①「アート・インクルージョンクリスマスプロジェクト2011」
（「あすと長町仮設住宅」でのクリスマスアート企画による交流促進事業）
②「アーティスト・ラン!! イボイシステーション!!」
（塩釜市伊保石地区仮設住宅でのラジオ放送や音楽活動を通したコミュニティ支援事業）
③「マイタウンマーケットキャラバン」
（被災地の住民が主体となり「街を模した市場」を作る仕組みを他の仮設住宅に伝えるプロジェクト））

**GruopⅡ 「聴く、話す、つながる場づくりの必要性」をカンがえる**

失ったものの大きさに立ちすくんで前に進めない時、誰かとの何気ないおしゃべりが心をほぐし、微かな光が射してくることがあります。そんな場所をどうやって創るのか。「対話」を育むことに取り組む2つのプロジェクトを検証します。

<参加プロジェクト>
①「女川コミュニティカフェプロジェクト」
（女川町立病院前コミュニティスペースでのアーティストによるワークショップと対話の場創り）
②「震災ケア・アートサロン」
（被災地で子育て中のお母さんと保育従事者向けアートワークショップと対話の場創り）

**GroupⅢ 「子どもに笑顔がもどるには」をカンがえる**

目の前に厳しい現実が横たわる時、そこに子どもの笑顔があること、子どもたちのために動くことが、大人たちに限りない勇気を与えてくれます。日常の風景が一変してしまった時、どうやってその笑顔を取り戻せばいいのか。2つの事例から考えます。

<参加プロジェクト>
①「カラダでぶつかり、汗を流す。集え、21人の浜っ子たち」
（津波被災で離散した石巻市立荻浜小学校の子どもたちが集まれる機会を創出）
②「アートポンプ計画_気仙沼　こどもと復興商店街ワークショップ」
（津波で被災した商店街復興のため、こども向けのワークショップを開催）

**GroupⅣ 「伝統―何が流され、失われたのか」をカンがえる**

遥かな過去から脈々と受け継がれ、当たり前のように人々の間にあったもの。街が流された時、それらも一緒に流されてしまったのでしょうか。伝統の再生は地域の再生にどのように役立っていくのでしょうか。もう一度その意味を確かめます。

<参加プロジェクト>
③「雄勝法印神楽　舞の再生計画」
（石巻市雄勝地方の神楽舞台の再建支援、小中学校での「神楽の舞ワークショップ」の実施）
④「アートポンプ計画_山元町　山元町伝統工芸職人支援事業」
（裂き織り等の伝統工芸を継承するための職人支援事業）

※「藤浩志とカンがえる（地域とアートをつなぐ美術家・藤浩志とともに被災地を訪問。調査ヒアリングを行うワークショップ）のメンバーは4つの分科会に分かれて参加。

Chapter2では、Chapter3のパネラーのほか、各プロジェクトの現場で支援に携わっているメンバーも参加。


東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業［宮城］
MIYAGI REPORT 2011-2012
10のプロジェクトとシンポジウム
編集｜えずこ芸術のまち創造実行委員会
〒989-1267 宮城県柴田郡大河原町字小島1-1
TEL.0224-52-3004 FAX.0224-51-1130
E-mail info@ezuko.com URL www.ezuko.com/
発行｜東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
TEL:03-5638-8800 FAX:03-5638-8811
URL www.bh-project.jp